



治者の先憂後楽 (狼少年としての識者)

(11月のごあいさつ)
2019年11月1日(金)

現在、日本の政府債務はGDP比で250%にも達し、主要国で最大となっている。社会保障費は増え続け、財政赤字と政府債務の拡大は、**将来世代への負担の先送り**であり、できるだけ**財政再建を急ぐべき**である。

現在、白井さゆり先生著の「お金の教科書」を読んでいるが、その中で、江戸時代という「閉ざされた経済」の中での通貨制度と幕府の財政政策を見ると、幕府は、貨幣の改鋳という「金融緩和政策」を取り、「元禄の繁栄」など成功することもあったが、結局は、**中毒的な改鋳と大商人等からの借入れ等**により、黒船来航対策費増もあり、**幕府の財政再建は失敗し、明治政府へと移行する。**

今、改めて幕末の経済状況を見て、財政破綻に瀕した日本の財政を考えると、**安易とも言える議論(FTPLやMMT)が語られている現状に不安を覚える。**

その一つはFTPL(物価水準の財政理論)である。もし、その国の国債の債権者のほとんどが、その国の者であるならば、**財政赤字を一種の規律をもって無視し続けたなら、物価は緩やかに上昇し、それが常態化することで財政赤字は実質目減りする。**これは**国債償還による財政再建よりはるかに効率的である、とする。(FTPL プリンストン大学 シムズ教授)**

これは、**将来に向かって財政再建を放棄することによって、現在のインフレ率を高めることが目的とされているが、これに、我が意を得たりと賛意を表す日本の学者もおり、国を憂える議論はないのかと心配である。**

他の一つは、MMT理論である。自国通貨を持つ政府は、**財政的な予算制約に直面することはない(国債をいくらでも発行できるし、それによって破綻することはない)**という考えである。すべての経済及び政府は、生産と需要について、物あるいは環境的な限界があるが、**急激なインフレにならない限りは、その限界を露呈することはない。**巨額の財政赤字があっても、インフレも金利上昇も起こっていない日本はMMTの成功例であるとする意見もある。(MMTの主唱者の一人 ステファニー・ケルトン教授)

財政再建の失敗は、亡国への道である。これは、江戸時代の教訓でもあった。先憂後楽は、治者の要諦である。国難を座視して、これでいいのであろうか。狼少年と言いつつ、世に警鐘を打ち鳴らすのが識者の役目ではなからうか。